

俳句 大津俳句会

山梔子くちなしに雨の重たき一日ひとひかな

井芹眞一郎

寝返りにつかず離れず夏蒲団なつぶとん

秋山 恵

病窓びょうそうの静かに暮るる若葉雨わかばあめ

市原 初女

散策さんさくに元気を貰もらふ夏木立なつこた

大塚喜久子

遠き日のごとく優しく植田風

佐賀 久子

黒南風くろはえや一気に島の海荒るる

松尾 昭雅

全身で声ころがして鳴く河鹿かじか

岡崎 浩子

朝堀りの筍山の茹ゆでけむり

佐澤 俊子

俳句 つのはな句会

溶けながら有事へ傾ぐかき氷

柴田しのぶ

樹液満つ青年五月の宙翔そらけよ

志賀 孝子

紫陽花の奥に親指姫ねむる

田上 公代

夏灯し老舗喫茶にジャズ流る

木庭 杏子

夕焼けて次第に消えてゆく平和

上杉 波

夕顔や女性自死者の黙もだに咲く

矢嶋 道子

奥座敷せせらぎの音 百合の花

梅木トキエ

梅の実の落ちて転げて日が暮れて

水野 春子

ねじり花心の奥の君に逢う

塚本 洋子

短歌 大津短歌会

びつしりと地を這い根を張る冬草を研ぎ
たる鎌で端から攻める

豊岡ミツル

愛と書き心こころと読ます本をかう星降る街の
小さき書店

吉永 恵子

この家に縁のありて黒猫と白猫眠る座布
団の上

坂本 杲子

日の暮れてひとり旅立つははそはは98の
齢を生きぬ

鞍 岳志

モシモーシテレホンの声掠かすれてる変りな
きこと確かめ安堵す

管野 静

地方からそよ風はこぶのど自慢苺農家は
鐘に踊りぬ

小平 善行